

梅花短大 家本 修 滋賀女短大 ○ 成田巳代子 大谷女短大 小林昭子
樟蔭東女短大 山本倫子 鳴門教育大 広瀬月江

目的 衣服の色の嗜好性や似合うといった感覚がどのように形成されるのか、母子間にもどのような関係や影響が認められるのか、あるいは、色の嗜好性はどのように形成されるのかといった問題に対しては、いまだ有効な回答は見出されていない。そこで、本研究においては、まず母子間の衣服の色の嗜好性と似合うと考えている色について、類似性と相違点を明らかにすることを目的に母子ペアでの調査を実施した。今回の調査では、流行や時節の影響を軽減するために、一時期において各年代の調査を同時に実施した。本報での目的は、子供の成長と共に母子間の色の嗜好性や似合うと考える色の一致率の変化について検討を行ったので報告する。

方法 幼稚園児、小学生低学年、小学生高学年、女子中学生、女子高校生、女子短大生とその母親を組にして、質問紙調査法による調査を実施した。幼稚園児は面接調査で、他の児童、生徒、学生については、集合調査を母親に対しては、託送調査でおこなった。被験者組数は、幼稚園児119組、小学校低学年児童434組、高学年児童570組、中学校生徒652組、高校545組、女子短大生573組。調査地域、大阪府下（一部、兵庫県、徳島県、滋賀県を含む）。調査項目・調査手法は、前回と同様の手法を用いた。

結果 ① 母親の年代が上がると「紺」の好みが増加する。② 子供の年齢が低いほど一致率は高く、母親の影響が大きいことが示唆される。③ 子供の年齢が上がると、嗜好範囲が拡大し淡い色も好まれ、高学年では、独自の嗜好性が始まる。④ 子供の嗜好色に母親の年齢による差異が少ないことから、独自の嗜好性よりも母親の影響が示唆される。